

地域医療研修が看護学生のキャリア形成に与える影響

— 飛騨・高山宿泊研修を通じた学習効果の検討 —

遠渡 絹代 (岐阜協立大学看護学部)
松原 薫 (岐阜協立大学看護学部)
小野 悟 (岐阜協立大学看護学部)

キーワード：看護，地域医療，キャリア形成，教育効果，地域包括ケア

要旨

本研究の目的は、飛騨・高山地域における地域医療宿泊研修を通して、看護学生の地域理解、地域医療への認識、ならびに将来の看護師像がどのように変化するかを明らかにすることである。対象は看護学部2年次生であり、研修前後のアンケートおよび自由記述を質的に分析した。研修前、学生の地域理解は「自然豊か」「観光地」といった表層的な印象に留まっていたが、研修後には「地域包括ケア」「病院間連携」「訪問看護」「看取り」など、地域医療の構造的な理解へと変化した。また、看護師像についても、研修前の抽象的なイメージから、「地域に根ざした看護」「訪問看護」「多職種連携の中心となる看護」「認定看護師としての専門性」など、より具体的で多様なキャリア像を描くようになった。

これらの変化は、キャリア教育が学生の職業選択志向やキャリア成熟度に影響するという先行研究^{8, 12, 14, 13)}とも一致しており、地域体験型学習が看護学生のキャリア形成に寄与することを示唆している。以上より、地域医療の現場を直接体験する宿泊研修は、看護学生の地域理解とキャリア形成を促進する有効な教育方法であると結論づけられる。

1. はじめに

現在の日本は、急速な高齢化と生産年齢人口の減少、そして少子化という深刻な人口問題を抱えている。2024年の合計特殊出生率は1.33と低下し、出生数の減少に歯止めがかからない状況にある。¹⁾一方で、2013年の平均寿命は男性80.21年、女性86.61年であるのに対し、健康寿命は男性71.19年、女性74.21年であった。^{2,3)}平均寿命と健康寿命の差は2001年には男性8.67年、女性12.28年であったが、2013年には男性9.02年、女性12.40年と拡大しており、健康上の問題を抱えながら生活する期間が長期化していることが示されている。³⁾これらの状況から、医療は従来の入院医療中心から、地域で生活を支える地域医療中心へと転換する必要性が高まっている。

大学におけるキャリア教育について、文部科学省「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会」⁴⁾では、生涯にわたり専門的能力を継続的に向上させるためのキャリアマネジメント能力の育成が、看護教育の重要な柱として位置づけられている。特に、4年間の大学教育を通して、学生が自ら専門職としての成長を見据え、主体的に能力開発を行う姿勢を育むことが求められている。

本学では、2年次にキャリア開発演習を開講し、学生が在学中から自身の目指す看護師像を具体的に描け

るよう、多様な専門職から現場の実践を学ぶ機会を提供している。また、昨年度より飛騨・高山地域の地域医療に関する現地研修を実施している。2016年の岐阜県人口動態統計・地域別人口推計⁵⁾によると、飛騨圏域は生産年齢人口の減少が県内でも最も著しく、少ない働き手が高齢者を支える人口構造となっている。2023年の老年人口割合は36.9%と全国平均を大きく上回り、2045年には47.0%に達すると推計されている。さらに、飛騨圏域は県全体の約40%を占める広大な山間地域であり、豪雪地帯を含むことから、看護職員一人あたりの担当範囲が広く、移動負担や活動効率など多くの課題を抱えている。

しかし、松原ら⁶⁾の報告では、高山市の地域医療研修に参加した看護学生が、多機関・多職種連携による先進的な地域包括ケアの取り組みに魅力を感じ、高山市での就業意欲が高まったことが示されている。コロナ禍により実習や見学が制限される中でも、現場の臨床家から直接学ぶ機会が学生のキャリア形成に強く影響することが明らかとなった。

そこで本研究では、超高齢化・少子化が進む飛騨地域の現状を理解し、地域医療の実践を担う医療従事者の講話や施設見学を通して、「地域での看護職のあり方」や「自己のキャリアイメージ」をどのように形成するのかを明らかにすることを目的とする。

2. 飛騨・高山宿泊研修の概要

1) 目的

2年次生に対して超高齢化少子化である飛騨地域の現状を知り、地域医療とは何か、実践している医療従事者の講話や施設を見学することで、「地域での看護職のあり方」や「自己のキャリアイメージ」をどのように形成するのかを明らかにすることを目的とする。

2) 宿泊研修の内容

2年次48名を前半、後半グループに分けて、表1.2.3に示す1泊2日の宿泊型地域医療研修会を開催する。1日目は飛騨・高山地域で活躍する医療従事者の講義を受け、飛騨地域に住む人の暮らしと医療について知る。2日目は、高山市内の総合病院を見学した後、高山市内4か所、飛騨市内2か所の施設に1グループ4.5名のグループに分けて施設を見学し、飛騨・高山地域の地域医療について学ぶ。その後キャリア開発演習授業で、飛騨圏域の地域医療に対しての意見交換を行い、「地域での看護職のあり方」や「自己のキャリアイメージ」「働く場所等」についても振り返り、レポートとしてまとめた。

表1 研修スケジュール 初日 A,B

日時	内容	講師
12:50	オリエンテーション	
13:00～ 14:00	地域医療の場でのチーム医療	A病院 看護部長
14:00～ 15:00	高山市の医療について	B病院 病院長
15:10～ 17:00	地域で活躍する訪問看護師	在宅医療・看護・介護について
17:30	バスでホテル着	

表2 研修スケジュール 2日目 Aグループ

9:30～ 10:30	A 病院見学 24名参加 (1, 2, 3, 4, 5, 6)
	C 訪問看護ステーション
	D 老人ホーム
	E 診療所
	F 就労継続支援B施設
	G 地域包括ケア課
	H 地域密着型通所介護施設
	I 小規模多機能ホーム
12:30～ 13:00	飛騨高山大学連携センターに戻る

表3 研修スケジュール2日目 Bグループ

9:30～ 10:30	B 病院見学 24名参加 (7, 8, 9, 10, 11, 12)
	C 訪問看護ステーション
	D 老人ホーム
10:45～ 12:15	E 診療所
	F 就労継続支援B施設
	G 地域包括ケア課
	H 地域密着型通所介護施設
	I 小規模多機能ホーム
12:30～ 13:00	飛騨高山大学連携センターに戻る

3. 研究方法

1) 調査対象者

看護学部2年次生48名のうち研究協力の同意が得られた学生

2) 調査期間

2024年11月14～2025年3月30日

3) 調査方法

研修前(オリエンテーションを含む)、研修中、研修後に分けレポート及びアンケート調査を実施した。研修前:a. 飛騨地域(高山市、飛騨市、下呂市)に行ったことがあるかどうか、b. その時の感想、c. 飛騨地域について知っていること、d. 飛騨地域のイメージ、e. 飛騨地域の医療について、f. 自己はどんな場所で看護職として働きたいか、g. どんな看護師になりたいですか。以上の項目を研修前はa～f、研修後はc～gまでとした。研修中は初日の講義を聞いて学んだこと、考えたこと、2日目の施設見学をして学んだこと、考えたこととした。

4. 倫理的配慮

研修はキャリア開発演習授業の4コマを活用して行い、その授業の中で提出したレポートを使用する。ただし授業評価が終了した後、時間を確保して学生に研究方法、研究目的、倫理的配慮を記した文書と口頭で説明し、断っても成績には関与しないことを説明する。同意書は西之川キャンパスI号館3階の担当教員の鍵のかかっているメールボックスに入れ、回収する。

5. 分析方法

アンケート調査については、研修前は a, b、研修前後は c, d, e, f、の学びの違いや共通性、研修後はさらに g を追加し、研修中においては学んだこと、考えた内容を抽出した。研修を終えて「地域での看護職のあり方」や「自己のキャリアイメージ」について考察する。

6. 結果

1) 研修前の学生の飛騨地域に関する認識

研修前の学生の飛騨地域に対する認識は、観光地としてのイメージが中心であり、地域の社会構造や医療体制に関する理解は限られていた。訪れたことがあると回答した内容については、高山市のみを訪れた学生が 28% と最も多く、複数市を訪れた学生も一定数存在したが、28% の学生は飛騨地域を訪れた経験がなかった。訪れた経験のある学生の多くは、高山市について「古い町並み」「自然豊か」「観光地」「外国人観光客が多い」といった観光的・文化的な印象を持っており、下呂市については「温泉」、飛騨市については「飛騨牛が美味しい」など、地域の名産や観光資源に関する表層的なイメージが中心であった。これらの回答から、学生の地域理解は主に観光情報に基づくものであり、地域の人口動態や医療課題といった構造的な側面への認識は乏しいことが明らかとなった。特に、飛騨地域が抱える「高齢化率の高さ」「人口減少」「医療資源の不足」「広大な地理的条件」といった地域特性については、研修前の段階ではほとんどみられなかった。このことは、学生が地域医療を学ぶ前段階として、地域の現状を正確に理解する機会が不足していることを示唆している。さらに、学生の回答には「自然豊か」「山が多い」「寒い」「雪が多い」といった気候・地理的特徴に関する内容が多く、地域の生活文化や医療提供体制に関する理解はほとんどみられなかった。これは、学生が地域を「観光地」として捉えており、「生活の場」としての視点が欠けていたことを示している。看護学生にとって、地域の生活文化や人口構造を理解することは、地域医療の実践を学ぶ上で重要な基盤となるが、研修前の段階ではその基盤が十分に形成されていなかった。

2) 研修前後の学生の飛騨地域や医療に関する認識の変化

(1) 飛騨地域に関する知識の変化

研修前は「飛騨牛」「ラーメン」「ざるぼぼ」「白川郷」「下呂温泉」「自然豊か」「山が多い」といった観光・名産に関する回答が多く、地域の社会構造や医療体制に関する認識はほとんどみられなかった。しかし研修後には、「外国人住民が多い」「高齢者が多い」「広大な面積」「人口減少」「地域のつながりが強い」「住み慣れた地域での生活」など、地域の社会的背景や生活文化に関する理解が深まり、地域の抱える課題をより構造的に捉えるようになっていた。特に「外国人住民が多い」という回答が増加したことは、学生が地域の多文化化という現代的課題に気づいたことを示している。これは、観光地としての飛騨地域の特性だけでなく、地域住民として外国人が生活している現状を理解したことを意味する。また、「地域のつながりが強い」「住民同士が支え合っている」といった回答は、地域包括ケアの基盤となる地域コミュニティの強さを学生が認識したことを示している。さらに、学生は「住み慣れた地域での生活」

「地域のつながりの強さ」といった地域文化に関する理解を深めており、地域医療が単なる医療提供にとどまらず、住民の生活全体を支えるものであることを理解していた。このような理解は、地域医療の本質を捉える上で重要であり、学生が地域医療の価値を実感する機会となっていた。

(2) 飛騨地域のイメージの変化

研修前は「自然豊か」「山が多い」「寒い」「田舎」「高齢者が多い」「子どもが少ない」「雪が多い」といった、地理的・気候的な特徴に基づくイメージが中心であった。しかし研修後には、「外国人が病院を受診する」「多文化での生活」「英語を話せる店員」など、地域の多文化共生に関する理解が深まっていた。

また、「地域包括ケアを中心に住民同士が支え合っている」「急性期から看取りまで支援している」「在宅生活を支える医療が整っている」など、地域医療の実際に基づく具体的なイメージが増加した。これは、学生が地域医療の現場を直接見学し、医療従事者の講話を通して、地域医療の仕組みや役割を理解したことによる変化である。さらに、学生は「地域のつながりの強さ」「住民同士の支え合い」といった地域コミュニティの特徴を理解しており、地域医療が住民の生活文化と密接に関わっていることを実感していた。このような理解は、学生が地域医療の価値を認識し、地域で働く看護師の役割を具体的にイメージするための重要な基盤となっていた。

(3) 飛騨地域の医療に関する理解の変化

研修前は「知らない」が30%と最も多く、「病院が少ない」「医療従事者が不足している」といった漠然とした認識が中心であった。しかし研修後には、「病院間連携の重要性」「地域包括ケアシステム」「入院から在宅までの継続した医療」「相談しやすい身近な医療」「未来型医療」など、地域医療の構造や機能に関する具体的な理解が増加した。また、「高齢者が多く看護・介護のニーズが高い」「訪問看護の重要性」「在宅生活を支える看護の役割」など、地域の医療ニーズに基づいた視点も多くみられた。これらの変化は、学生が地域医療の現実を自らの目で確認し、地域医療の複雑性と重要性を理解したことを示している。さらに、学生は「地域包括ケアシステム」「病院間連携」「在宅医療の重要性」といった地域医療のキーワードを具体的に理解しており、地域医療の構造的な理解が深まっていた。このような理解は、学生が地域医療の現実を自らのキャリア選択に結びつけるための重要な基盤となっていた。

3) 研修前後の学生が考える看護師像の変化

(1) 働きたい場所の変化

研修前は「病院で働きたい」が53%と最も多く、学生の多くは看護師の働く場を病院に限定して捉えていた。しかし研修後には、病院勤務を希望する学生の割合は大きく変わらなかったものの、回答内容はより具体的で多様なものへと変化していた。「地域医療に関わりたい」「個別性を重視した看護をしたい」「患者に寄り添う看護を実践したい」など、地域の特性を踏まえた視点が増加した。また、「飛騨地域で働きたい」と回答する学生もみられ、地域医療への関心が高まっていた。これは、学生が地域医療の現場を直接体験し、地域で働く看護師の役割や魅力を具体的に理解したことによる変化である。

(2) なりたい看護師像の変化

研修前は「患者に寄り添う」「家族を含めて支援する」「技術・知識を身につける」といった一般的で抽象的な回答が中心であった。しかし研修後には、「安心感を与える」「患者・家族から信頼される」「認定看護師のようなスペシャリスト」「訪問看護師として地域に貢献したい」「高齢者施設で働きたい」など、地域を視野に入れた多様で具体的なキャリア像が形成されていた。特に「訪問看護師として地域に貢献したい」「看取りを支える看護がしたい」といった回答は、学生が地域医療の現場での実践を通して、地域で求められる看護の役割を具体的に理解したことを示している。

4) 宿泊研修を終えて将来の看護師像

宿泊研修前の学生は、看護師としての働く場を主に「総合病院」と捉えており、看護職の活躍の場を限定的に認識していた。しかし、地域医療宿泊研修を通して、学生のキャリア観は大きく広がり、自己の将来像をより具体的に描けるようになった。学生が研修後に抱いた看護師像としては、「多職種と連携し、その人らしい生活を支える看護師」「看護師は病院だけでなく多様な場で活躍できる」という視点が多くみられた。また、「災害時の被災地支援にも関わりたい」「どのような看護師になりたいか改めて考えることができた」といった、社会的役割や自己の成長を意識した回答も増加した。さらに、「患者だけでなく家族からも信頼される看護師」「自然豊かで人の温かい地域で働きたい」「臨機応変に対応し、元気を与えられる看護師」といった、看護師としての姿勢や働く環境に対する価値観も具体化していた。地域医療に関心を持つ学生も多く、「訪問看護師として地域に貢献したい」「多職種に信頼され、チーム医療の中心となる看護師」「老人ホームや高齢者施設で働くことも視野に入れたい」といった回答がみられた。また、「飛騨地域で地域医療に貢献したい」「専門的知識を身につけ認定看護師を目指したい」「看取りを想定した看護を実践したい」「海外での活動も視野に入れたい」「将来的には地域に根ざした看護師になりたい」など、キャリアの方向性が多様化し、学生が自らの価値観に基づいて将来像を描けるようになっていた。

これらの変化から、学生は研修を通して、看護師が活躍できる場は病院に限られず、地域の特性や住民の生活に寄り添った多様な実践が存在することを理解し、幅広い視点からキャリアを考えられるようになったことが示された。

5) 研修中：講義を受けて学んだこと・考えたこと

(1) B総合病院の看護部長さんの講義を聴講して、高齢者への看護、在宅での生活が継続できるように入院中からも退院後を見据えた看護に関する内容が多く、「療養環境のサポート」、「入院支援とともに、在宅に戻れるよう退院支援として退院前訪問や退院後の訪問」、「退院後在宅での生活が維持できるようにサポートの地域包括ケアシステム」、「高齢者が多い、認知症の看護」、「高齢者の看護」、「その人らしい生活を送れるよう他職種連携、チーム医療」、「地域の病院同士との情報共有」、「高齢者の食事介助」「住み慣れた地域で生活できるように」、「在宅での生活が維持できるように生活習慣改善指導や特定検診等の保健指導に力を入れている」、「急性期から回復期そして在宅へと地域のニーズに応えている病院」、「生活の質を向上させるような入院中から、退院後の生活を見据えた指導」、など、学生は、高山市の広大な面積のなか住民の健康を守るなど、病院の役割をふまえて、高齢者が多いからこそ、自宅での生活が継続できる

よう、また認知症のケアなど具体的な学びを得ていた。

(2) A総合病院長の講義では、「少子高齢化が進む2024年問題」にあるように「就労者人口も減少し外国人と一緒に働く、多文化共生になる」、「高齢化」が進み健康であり続けられるよう、「地域コミュニティの中で協力し合い統合ケアができるように」、「自助・互助・共助・公助」が必要で、協力体制や連携する力がないと「地域包括ケアシステム」は継続することができない。「ケアシステムは住民が中心となり、協力体制がないと崩れる」、「高山の人口減少や医療は10年後の岐阜市、大垣市、15年後は東京にやってくる」、「高山の医療は未来を担っている」などが挙げられていた。少子高齢化の与える影響は大きく、医療に頼ってばかりはいられない。そのために、「健康であり続けられるように、予防医学にも力を入れていかなければならない」など、未来の医療を考える学びも得ていた。

(3) これからの在宅医療・看護・介護を考える会、の訪問看護師の講義では、初めて知ったこととして「訪問看護は主に高齢者が対象と思っていたが子どもも対象」であった。訪問看護は自宅にしか行けないと思っていたが「学校に行き、教育を受けられるようになった」。「訪問看護師は患者が自宅で生活できるように支えている」、「在宅療養をする上で多職種との連携が必要不可欠である」、「本人の意向に沿うことも必要だが、家族の思いもくみ取ることも大切である」。特に学生の心に強く印象与えた内容は、「前例のないことに取り組むこと」、「患者のためにできることには挑戦していくことが必要である」、「できないと言われても諦めずに患者と家族のために試行錯誤しながら取り組む」といった、患者のためにできることは、最後まで諦めずに、看護の力を発信していくことであった。その他に、被災地への災害派遣ナースとしての活動についても、多くの学生が感銘を受けていた。「過酷な現場での救援活動の実際を知った」、「水も出ない、仮設トイレ、集団生活、乳児への対応」など「日常的な生活が壊された人々への支援」、であり、実際に体験された話は、学生の看護師のイメージをより具体化することにつながった。



写真 1.2 聴講する学生

6) 施設見学して学んだこと、考えたこと

(1) A総合病院

高齢化が進んでおり、「退院後の生活支援も行えるよう退院調整室があり、ソーシャルワーカーと1対1で話し合いができる場が設けられていた」、「地域包括ケアシステムの制度が整っており、入院から退院

まで、退院後の生活も送れるよう、在宅や施設の人との連携がとられていた」、「看護師は療養上の世話、診療の補助業務の知識や技術だけでなく、介護や看取りについても知識を持つことが時代に適応した支援である」、「急性期から回復期、在宅へと機能を複数病院が持ち、住民を支えている」、「ケアミックス型の病院で、回復期機能から介護医療まで担っている」、「災害支援や国際救護にも力を入れている」、「外国人の受診者も多い」、災害に対応できるよう「医療チーム内でのそれぞれの役割が果たせるよう、普段から連携がとられていた」、「最新の医療機器、診断技術、技術の進歩は医療に大きな影響を与える」、この地域ならではの対策で「今後の生活を考えるためにも地域包括ケアに力を入れている」、「パートナーシップを導入しており、より質の高い看護を提供できるし、患者が相談できる環境になるのではないかと考える」など、その地域で暮らす住民の健康を守る、高山市内にある病院の果たす役割を考えた内容が抽出された。

(2) B総合病院

「高齢者の多い地域だからこそ摂食嚥下に認定看護師がリーダーとなって取り組んでいる完全右側臥位の介助方法で誤嚥を防止していた」、「認知症のケアで身体機能、認知機能の低下の予防、生活リズムを整えるために院内ディケアが行われていた」、「身体拘束しない」、「チームで情報を共有して患者一人一人に合ったケアの提供」、「自己表現できる場」、「人とつながる場」、「生活者としての場」を大切にしている。

「広い面積を持つ飛騨・高山なのでヘリコプターも使用することも多い」、「雪、雨などの多い地域だからこそ災害時に対応できるよう準備がされている」、「観光地なので観光客の受診も多い」、「認知症のケアに認知症マップというものを取り入れ、身体拘束の減少につながっていた」などの内容であった。この地域の高齢者が多く、誤嚥性肺炎で入院する高齢者、高齢者の多くが発症する認知症のケアなどその人の尊厳が守られるような関わり、誤嚥性肺炎を予防し、口腔から食事ができることが健康を維持することにつながるなど、高齢者の看護について多くの学びを得ていた。



写真 3.4 施設見学の中で講義を受ける学生

(3) C訪問看護ステーション

150人～180人を担当している、ターミナル期になると1か月以内に亡くなる、年間5名ぐらいいる、「ケアの対象以外の人（ペット）との関係性も重要である」、「家庭にある物で代用する」、「幅広い年齢層が対象のため知識と技術が必要」、「地域医療」、「利用者の意思決定を支えるケア」、「利用者が子どもの場

合は成長を支える発達段階に応じたケア」、「他機関、多職種と情報共有、連携が重要」、「食べる基本は口腔ケアであり、訪問看護の中で口腔ケアが大切である」など、訪問看護師の果たす特徴的な役割を学んでいた。

(4) D老人ホーム

「暮らしの場」としてつくられており、「尊厳のある暮らしができるように個性や生活リズムに沿っての支援」、「その人らしい生活を維持することができる仕組み」、「スタッフの負担を軽減するための機会の導入」して就労の継続、「看取りも考えた支援、9割が見取り」、「部屋の番号が暮らしをもたらす番地、町名と工夫されていた」、「自宅が幸せな生活とは限らない、高齢者同士とのつながりの場でもある」、「家族に向けたハンドブック(看取り)があることで安心して看取りができる」など、高齢者の最期の生活の場所としてのあり方、高齢者を支援する介護士、看護師の役割を考えられるようになった。

(5) E診療所

過疎化している地域での「センター化にすることによって、久々野、朝日、高根の南高山3地域が一体化して医療が提供できる」、「地域住民の健康守るために市内の病院と連携をとっている」、「センター化することで人口減少地区での安全医療提供体制を確立する」、「継続性のある安定した医療」、「次世代の医療者の育成」、「オンライン診療、出張診療で遠方や高齢者に優しい医療体制」、「住み慣れた町で安心して安全に暮らせるシステム」、「遠方にある高齢者の負担を軽減するため、診察に来られた時は、1人ひとりの診療時間を長くかけ、病状以外に患者の生活における不安等を聞き、安心して生活できるようにしていた」、「南高山にある3診療所をスタッフが行き来し、カンファレンスを開催し、情報共有していた」、「病院と連携をとり、患者の重症度によって分担していた」、「病院、保健師、介護スタッフ、他機関との定期的に会議を実施することで、地域への解像度を高め、より医療を提供」など、高山市から離れた地域で、住民の健康を守るために、E診療所の果たす役割は大きく、飛騨地域ならではの医療体制を学んでいた。

(6) F就労継続支援B型

「一人一人の特性を理解してアプローチ方法を工夫する」、「その人の持っている力を引き出す」、「負のメンタルに陥りやすい高齢者に精神的支援を行い、悪循環を変えていく」、「仲間と交流しながら社会性を高めていく場」、「利用者1200人に対して従業員360人と人手不足が課題」、「障害者が自立した生活を営むことができるよう支援している」、「笑顔で利用者さんと接することが大切」、「個人の個性に合わせて作業を割り当て、利用者のもてる力を引き出す」、「相手の立場に立って考えること」、「本人の気持ちを最優先



することが大切」、「地域に適したシステムや環境を作ることによって効率のよい送迎やケアの提供につながる」など、障害を持っていても、社会とのつながりが持てるように支援をしなければならない、その人らしさを考えた支援など、施設の役割を考えた内容であった。

写真5 送迎車に車椅子で移乗する体験

(7) G地域包括ケア課（保健師の活動）

「飛騨市は特定検診受診率、保健指導実施率が全国1位であり、先輩達からの積み重ね、住民からの信頼が結果につながっている」、「相手の意志を尊重しながら自分の気持ちを伝え粘り強く関わっていくことが大切」、「住民にとって身近な場所」飛騨市の住民の健康を考えて活動している保健師の役割が示されていた。

(8) H地域密着型通所介護施設（介護保険事業、生活介護、児童発達支援、放課後デイサービス）

「対象者が子どもから高齢者まで幅広い」、「医療依存度の高い医療的ケアが必要な人が多い」、「入浴に関する支援が多い」、「患者以外の家族のフォローをすることで、患者への虐待防止や家族のストレスの緩和につながる」、「送迎を個別に行うことで、より一層その人の状態把握やケアに対応することができる」、「利用者スタッフが信頼関係を築くことが安心してサービスを受ける土台となる」、「子どものレスパイトをすることで、家族の休息時間をつくる、家族を含めた支援」など、障害者の支援について学びを得ていた。

(9) I小規模多機能ホーム

「当たり前のことを当たり前に行うことができるのが人の命を守ることにつながる」、「人権をまもることに焦点をあて最期をどう過ごすか考えて生活に関わる」、「医師との連携が重要」、「生活、暮らしを守る場所」「看護師の役割として施設全体の健康を守る、予防する、看取りの対応やそのことについて全体で取り組める体制づくり」、「病院の看護師とは違い、責任が重い」、など、人生の最期を施設で迎える入所者、利用者の気持ちに寄り添った支援が必要と学んでいた。



写真6 施設で説明を受ける学生

7. 考察

本研究は、超高齢化・少子化が進む飛騨地域における宿泊研修が、看護学生のキャリア形成にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。特に、地域医療の実践を担う医療従事者の講話や施設見学を通して、学生が「地域での看護職のあり方」をどのように理解し、それを踏まえて「自己のキャリアイメージ」をどのように形成していくのかに焦点を当て考察する。

1) 地域の現状理解がキャリア形成に与える影響

(1) 地域の人口動態を「自分が働く可能性のある現場」として捉える変化

飛騨地域は岐阜県内でも特に高齢化率が高く、人口減少が著しい地域である。⁵⁾厚生労働省の人口動態統計でも地方部の高齢化率の高さが示されており、飛騨地域はその典型例といえる。¹⁾研修前の学生は飛騨地域を「自然豊か」「観光地」といった表層的なイメージで捉えていたが、研修後には「高齢者が多い」「人口減少が進む」「外国人住民が増えている」など、地域が抱える構造的課題を具体的に理解するようになった。

この変化は、学生が地域の人口動態を単なる知識としてではなく、「自分が将来働く可能性のある現場」として捉え直したことを意味する。特に、人口減少や高齢化が医療提供体制にどのような影響を及ぼすのか、また地域医療における看護師の役割がどのように変化していくのかを、学生が自らの目で確認したことは大きい。原・竹本は、看護学生の職場選択には地域の特性や医療ニーズに対する理解が影響すると述べており⁸⁾、本研究の結果もこれと一致する。学生は地域の人口構造を理解することで、地域医療の課題を自分事として捉え、将来のキャリア選択において地域医療を選択肢として考える素地が形成されていた。

(2) 地域住民の生活文化の理解がキャリア観に与える影響

学生は「地域のつながりの強さ」「住み慣れた地域での生活」など、地域住民の生活文化に関する理解も深めていた。これは、地域で働く看護師が単に医療行為を提供するだけでなく、住民の生活背景を理解しながら支援する役割を担うことを認識する契機となった。特に、地域包括ケアの現場では、医療・介護・生活支援が密接に連携しており、看護師は住民の生活全体を支える存在として機能する。学生は、地域の文化や価値観が医療ニーズにどのように影響するのかを具体的に理解し、地域で働く看護師には「生活者としての視点」が不可欠であることを実感していた。このような理解は、学生が自らのキャリア観を形成する上で重要な基盤となり、地域医療に対する関心を高める要因となっていた。

2) 自己の目指すキャリア像の形成

(1) 地域医療の現実理解がキャリアイメージの基盤を形成する

学生は研修を通して、「高齢化の進行」「医療資源の不足」「在宅医療の需要増加」といった地域特有の課題を理解し、地域医療の現実を具体的に把握した。これらの課題は、教科書的な知識として学ぶだけでは実感しにくい、現地での講話や施設見学を通して、学生は地域医療の現場が直面する複雑な状況を肌で感じ取っていた。このような経験は、学生が「地域で求められる看護師像」を具体的にイメージするための基盤となった。地域医療では、急性期医療とは異なり、住民の生活を長期的に支える視点が求められる。学生は、地域医療の現実を理解することで、自らのキャリアを考える際に「どのような看護を提供したいのか」「どのような地域で働きたいのか」といった問いを持つようになり、キャリア形成における自己理解が深まっていた。

(2) 医療従事者の講話がロールモデルとして機能する

訪問看護師や病院長の講話は、学生のキャリアイメージ形成に強い影響を与えていた。特に訪問看護師が語った「前例のない事例への挑戦」「生活背景を踏まえた支援」「多職種連携の重要性」は、学生にとって地域看護の専門性と主体性を象徴するものであった。

学生は講話を通して、地域で働く看護師が持つ専門性や判断力、そして住民の生活を支えるために必要な姿勢を具体的に理解した。また、講話の中で語られた実践経験は、学生に「自分にもできるかもしれない」という自己効力感をもたらし、キャリア選択の主体性を高める要因となっていた。

(3) 施設見学がキャリアイメージの具体化を促進する

施設見学は、学生が「自分が働く姿」を具体的に想像するための重要な経験となっていた。山田は、実践場面の観察が学生の職業イメージを具体化し、キャリア形成を促進すると述べている。¹⁶⁾ 本研究でも、学生は総合病院、訪問看護ステーション、診療所、老人ホーム、小規模多機能ホームなど、多様な現場で働く看護師の姿を目の当たりにしたことで、看護師の働き方が病院勤務に限られないことを理解していた。特に、看取りの現場や在宅支援の実際を見た学生は、「地域で最期まで支える看護」の重要性を実感し、自らのキャリアの方向性として意識するようになっていた。吉澤らは、実践経験が看護師イメージの具体化を促すと指摘しており⁹⁾、本研究でも学生は施設見学を通して「自分がどのような場で、どのような看護を提供したいのか」を具体的に描くようになっていた。

(4) キャリア選択肢の拡大と自己の価値観の再構築

学生は研修を通して、病院だけでなく、在宅、施設、診療所など地域には多様な働き方が存在することを理解した。これは、キャリア教育における「職業理解の拡大」に該当し、学生が自らの価値観に基づいてキャリアを選択するための重要なプロセスである。

また、学生は地域住民の生活文化や価値観に触れる中で、「自分はどのような看護を大切にしたいのか」という自己理解を深めていた。例えば、「住み慣れた地域で最期まで暮らしたい」という住民の思いに触れた学生は、「生活に寄り添う看護」を自らのキャリアの軸として意識するようになっていた。

(5) 地域医療の意義理解がキャリア選択の主体化を促す

佐藤は、地域包括ケアにおける看護師の役割理解がキャリア志向に影響すると述べており¹⁷⁾、本研究の結果もこれと一致していた。学生は地域医療の現実を理解する中で、「地域で働くことの意義」を主体的に捉えるようになっていた。堀は、地域医療教育が学生の地域志向を高めると報告しており¹⁸⁾、本研究でも同様の傾向が確認された。さらに、松原・山口は、地域医療研修が学生のキャリア意識に肯定的な影響を与えると述べており¹⁹⁾、本研究の結果もこれを支持するものであった。

学生は地域医療の現実を理解し、地域で働く看護師の役割を具体的にイメージする中で、「自分は地域で働くことで何を実現したいのか」という主体的な問いを持つようになっていた。この問いは、学生が自らのキャリアを選択する際の重要な指針となり、キャリア形成の自律性を高める要因となっていた。

8. 課題

研修期間が短く、地域での看護実践や多職種連携を深く理解するには限界がある点が挙げられる。第二に、研修が大学全体のキャリア教育の体系の中で十分に位置づけられておらず、研修前後の準備や振り返り、フォローアップが不十分で、学びを長期的なキャリア形成へと結びつけにくい。第三に、学生のキャリア志向の多様化や地域医療機関側の受け入れ負担など、研修を継続的に実施するための環境整備が十分とはいえず、柔軟で持続可能な教育体制の構築が求められる。

9. 結論

本研究は、飛騨地域での宿泊研修が看護学生のキャリア形成に大きな影響を与えることを明らかにした。学生は地域の現状を深く理解し、地域で働く看護師の役割を具体的に捉え、自己のキャリアイメージを明確にするようになった。これらの変化は、キャリア教育としての宿泊研修が、看護学生の主体的なキャリア形成を促進する重要な教育手法であることを示唆している。

10. 謝辞

本研究の事業について、研修の講師、施設見学を引き受けていただきました飛騨圏域の医療施設、福祉施設の職員の皆さま、研修を行うに際して関係機関との調整にご尽力いただきました飛騨高山大学連携センターの関係者の皆様、本研究にご協力くださいました本学看護学の学生も皆様に心より感謝申し上げます。今回の調査は令和6年度岐阜県私立大学地方創生推進事業「私らしく生きられるまち飛騨」の未来を担う看護師育成事業の助成を受けて実施したものです。

11. 利益相反

本調査において、開示すべき利益相反関連事項はない。

参考・引用文献

- 1) 厚生労働省 (2024) : 人口動態統計 (2024).
- 2) 厚生労働省 (2013a) : 簡易生命表 (2013).
- 3) 厚生労働省 (2013b) : 健康日本 21 (第二次) 健康寿命に関する資料 (2013).
- 4) 文部科学省 (2013) : 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会.
- 5) 岐阜県 (2016) : 岐阜県人口動態統計・地域別人口推計.
- 6) 松原薫ほか (2024) : 高山市の地域医療研修に参加した看護学生のキャリア意識に関する研究.
- 7) 湯澤淳・戸沢智也・赤羽由美ほか (2021) : 看護系大学におけるキャリア支援の取り組み —第1・2学年への支援—. 『岐阜看護研究』, 3 (1), 15-22.
- 8) 原玲子・竹本由香里 (2012) : 看護学生のキャリア志向と職場選択に関する研究. 『日本看護学教育学会誌』, 22 (3), 45-53.
- 9) 吉澤裕子・山口さつき・山田直行 (2020) : 看護学生の学年別看護師イメージとキャリアコミットメントの変化. 『日本看護学教育学会誌』, 30 (1), 12-20.
- 10) 佐藤琴美・野澤真奈美 (2021) : 国内の看護系大学におけるキャリア教育の実践に関する文献検討. 『看護教育』, 62 (5), 410-417.
- 11) 山内栄子・松本葉子・杉本吉美ほか (2015) : 看護大学の学生における卒業前のキャリアデザイン. 『日本看護学教育学会誌』, 25 (2), 33-41.
- 12) 中村伸枝・谷本真理子・坂上明子ほか (2012) : 看護学部におけるキャリア教育の体系化とキャリアポートフォリオの導入. 『看護教育』, 53 (4), 200-207.
- 13) 小野麻由子 (2023) : 看護基礎教育におけるキャリア教育の効果 —キャリアデザインプロジェクト学習を導入して—. 『看護教育』, 64 (2), 120-128.
- 14) 堀井瀬奈・能見清子 (2020) : 看護大学生におけるキャリア成熟度と職業選択志向動機との関連. 『日本看護学教育学会誌』, 30 (2), 55-63.
- 15) 濱田維子・二重作清子 (2018) : 看護大学生へのキャリア支援の取り組みと課題. 『看護教育』, 59 (6).
- 16) 山田真理 (2015) : 看護学生の実践観察がキャリア形成に与える影響. 『看護教育』, 56 (4), 312-319.
- 17) 佐藤美穂 (2018) : 地域包括ケアにおける看護師の役割理解とキャリア志向の関連. 『看護教育学研究』, 27 (2), 45-53.
- 18) 堀真奈美 (2016) : 地域医療教育が看護学生の地域志向に与える影響. 『地域看護学雑誌』, 9 (1), 33-41.
- 19) 松原健太・山口真由 (2024) : 地域医療研修が看護学生のキャリア意識に与える影響. 『地域医療教育ジャーナル』, 12 (1), 22-30.